J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol.11, No. 1 (2006) 17～34

びわ湖の環流と柿本人麻呂の近江荒都歌

竹生　政資[1]・西　　晃央[2]

The Gyro of Lake Biwa and The Kaki-no-moto Hitomaro's Poem on the Ruins of Oumi-Ootsu Palace

Masasuke TAKEFU・Akihiro NISHI

要　　旨

万葉集の31番歌、柿本人麻呂の近江荒都歌の第二反歌「楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも」は、通説では「楽浪の志賀の大わだは、今このように（人待ち顔に）淀んでいても、昔の人にまた逢えようか（、逢えはしない）。」の意味に解されている。しかしながら、この解釈が通説化する以前には「淀むとも」の解釈をめぐって議論があった。すなわち、「淀むとも」の「とも」を文法的に「仮定条件（反実仮想）」とみるか、それとも「確定している事実の修辞的仮定」とみるかの議論である。一方、最近のびわ湖の水流の調査研究により、びわ湖の「北湖」には二つの大きな安定した「環流」（渦状の流れ）が存在することがわかってきた。この論文では、31番歌を解釈するにあたって、この「環流」の存在が本質的であることを指摘し、この歌は、現在通説となっている「修辞的仮定」による「実景」を詠ったものと解釈するよりも、むしろびわ湖の「北湖」に存在する「還流」の存在を念頭におきつつ「反実仮想」として解釈すべきことを提案する。

1．はじめに

万葉集は、天平宝字三年（759）一月一日以前に作られた約4500種の和歌を収録したわが国初の歌集であり、その後の日本和歌文学に大きな影響を与えてきた。万葉集の歌には、日本古代の人々の生活や思想がとても生々しく表現されており、また歌以外にも随筆や手紙などが含まれており、単に文学作品としてだけでなく、奈良時代以前の歴史を知る上で貴重な史料として古代史学の分野でもとりわけ重要視されている。

万葉集に関する研究の歴史は古く中世以前までさかのぼるが、特に江戸時代に入って実証的な研究がさかんとなり、現代に至るまで膨大な研究が重ねられてきている。しかしながら、万葉集の歌はすべて独特な漢字表記によって記述されているために、今なお歌の「訓み方」さえ確定していない「難訓歌」と呼ばれているものがかなりある。また訓みが確定した歌の中にも、歌の意味がまだ十分解明できていないものも数多く残されている（特に「東歌」の中にこれが多い）。

[1] 佐賀大学・医学部・地域医療科学教育研究センター（takefu@cc.saga-u.ac.jp）
[2] 佐賀大学・文化教育学部・理数教育講座（nishia@cc.saga-u.ac.jp）

私たちがここで取り上げる歌は、後者のタイプの問題に属するものであり、柿本人麻呂の近江荒都歌の第二反歌（31番歌）の意味について考察する。最近、びわ湖の水流の調査研究により、びわ湖の「北湖」には二つの大きな安定した「環流」（渦状の流れ）が存在することが知られている。この研究では、近江荒都歌の第二反歌を解釈するにあたって、この「環流」の存在が本質的であることを提案する。

2．問題点は何か

私たちがこれから考察する歌は万葉集の31番歌である。この歌は29番長歌に続く二つの反歌のうち第二番目のものである。まずこれらの長歌と反歌をあわせて掲載しよう。これらの歌の「訓み」はすでに確定しているので、原文は省略して訓読された結果のみを掲載する。万葉集の訓読は、原則として岩波書店の「新日本古典文学大系」本によることにする。

近江の荒都に過りし時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌

29　玉だすき　畝傍の山の　橿原の　ひじりの御代ゆ　或いは云ふ、「宮ゆ」　生れましし　神のことごと　つがの木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを　或いは云ふ、「めしける」　天にみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を越え　或いは云ふ、「そらみつ　大和を置き　あをによし　奈良山越えて」　いかさまに　思ほしめせか　或いは云ふ、「思ほしけめか」　あまざかる　鄙にはあれど　いはばしる　近江の国の　楽浪の　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の命の　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと言へども　春草の　繁く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる　或いは云ふ、「霞立ち　春日か霧れる　夏草か　繁くなりぬる」　ももしきの　大宮所　見れば悲しも　或いは云ふ、「見ればさぶしも」

反歌

30　楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

31　楽浪の志賀の　一に云ふ、「比良の」　大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも　一に云ふ、「逢はむと思へや」

この一連の歌は、持統天皇（在位687－696年）の時代に、柿本人麻呂が先々代の天智天皇（在位662－671年）の都であった大津宮跡を通過した際に、旧都の荒れた様子をながめて作ったものである。29番長歌と30番反歌については、解釈上特に問題となるような点はない。

（歌の前半は省略）…むかし天智天皇が天下を統治されたという大津宮の跡地には、今は春草が生い茂り、霞が立ち込めている。そんな大宮跡を見ると悲しい。

志賀の唐崎は昔と変わらずにあるが、（当時ここで船乗りをして楽しんだという）大宮人の船はいつまで待ってもやって来ない。

ところが、31番反歌については従来から議論がある。特に「淀むとも」という第三句の解釈が問題とされてきた。とりあえず現在のところ「通説」となっている解釈は以下のとおりである（歌の異伝の句についてはここでは省略する）。

志賀の大わだ（湾曲した入江）は、今このように（人待ち顔に）淀んでいるけれども、昔の人（大宮人たち）にまた逢うことがあるだろうか…いや決してないだろう。

最近のテキストはすべて上のような解釈をとっている。しかしこの解釈で納得がいくだろうか。私たちは、この解釈が通説化する以前に議論を戻し、この歌の問題点についてもう一度はじめから検討し直してみたい。そもそもこの歌の問題点は「淀むとも」の解釈にあった。文法的には「とも」は接続助詞で、「逆説の仮定条件」か「修辞的仮定（確定している事実を仮定的に表現して強調する修辞法）」として用いられる。上に示した解釈は「とも」を「修辞的仮定」として解するものであるが、実はこの解釈には多くの問題点がある。詳しい議論は4．2節にゆずり、ここでは問題点を一つ指摘しておくにとどめる。

万葉集では「淀む」という語は、「海や川の水が流れずに留まっている状態」か、あるいはその比喩として「男女の恋愛が停滞して進展しないこと、恋愛で心が動揺したり『ためらう』こと」などを意味する。例えば、「よど（淀）」という語を含む歌は万葉集中に21例あり、そのうち「よどむ（淀む）」という動詞（およびその活用形）を含む歌は10例あるが、これらはすべてこの意味で用いられている。通説が説くような「人待ち顔に淀む」などという用法は、（いま問題にしている31番歌を除き）ただの一例さえもない。したがって、びわ湖の水が「人待ち顔に淀む」という発想は万葉人のものではなく、「つじつま合わせ」のために後世の人々が考え出したものかも知れないのである。

人麻呂が31番歌で表現したい気持ちは、歌の後半部「昔の大宮人たちに逢うことは二度とないだろう」にある。当然この気持ちを導くために歌の前半部があるはずだが、その部分が「志賀の大わだが今こうして目の前で『淀んでいる』けれども」というのでは、ピントがずれているように思われる。「湖の水が淀んでいる」ことと、「昔の人に二度と逢えない」ということの間に一体どのような関連があるというのだろうか。この疑問に対して「通説」では、人麻呂は、びわ湖の淀んでいる水を見て「人待ち顔に淀んでいる」と「擬人化」して詠んだのだろうと説明するが、多くの「淀む」の歌があるにもかかわらずこのような用例が一つもないだけに、単なる「つじつま合わせ」ではないのかという疑念が頭の中を去らない。

比較のため、「淀むとも」が「修辞的仮定」として用いられている明確な例を一つ示そう。

参考歌①：松浦川七瀬の淀は淀むとも我は淀まず君をし待たむ　（05／0860）

この歌の「淀むとも」の意味は非常に明確で、31番歌のような「ピントのずれ」はまったくない。

松浦川の七瀬の淀は「淀む」ことがあっても、私の心の中の川（恋愛の気持ち）は「淀む」ことなく、あなたを待とう。

ここでは「松浦川の七瀬の淀」が具体的に「淀む」例として詠まれているが、歌の大事なポイントは、淀むことがありうる「自然界」の川と、淀むことがまったくない作者の「心の中」の川を対比させ、「淀むとも」という「修辞的仮定」の表現を用いることによって作者の「淀まない心」を強調している点である。このように、この歌では、歌の前半部と後半部が「誰にでも納得できる形」で自然に結び付けられているばかりでなく、適切な比喩によって作者の気持ちが強く伝わってくるのである。

これに対して、人麻呂の31番歌では、「通説」のような解釈をとる限り、歌の後半部「昔の大宮人たちに逢うことは二度とないだろう」と、歌の前半部「志賀の大わだが『淀んでいる』」との間には「納得のいく自然な関連」があるようには思えない。「歌の神様」とされる人麻呂が、このようなピントのずれた

歌を作ることが果たしてあるだろうか。

なお、上の松浦川の歌では「淀むとも」を「淀めども」という逆接「確定」条件の表現に変えても意味は変わらない。しかし、作者があえて「淀むとも」という修辞的「仮定」の表現を用いたのは、こちらの方が「たとえ～であっても」という「聞き手の気を強く引く表現」だからであろう。「淀めども」は単に「～だけれども」という意味であり、「ごく平凡な表現」でしかないからである。

とりあえず、ここでは以上の問題点があることを指摘するにとどめ、次に31番歌が過去にどのように解釈されてきたかを調べてみることにしよう。以下に、先行研究の主な解釈を出版年の新しいものから順に列挙する。なお、記載形式をそろえるため、内容に影響を与えない範囲内で、順序や記号表記などを一部変更した。

3．先行研究

3．1　新日本古典文学大系の解釈[1]

【大意】楽浪の志賀の〈一本に「比良の」と言う〉大わだは、今このように淀んでいても、昔の人にまた逢えようか〈一本に「逢うだろうとも思えない」と言う〉。

○「志賀の大わだ」は、京域の北東または南方に比定されている。「淀むとも」は、人待ち顔に淀んでいてもの意。異伝の記載が長歌の「或云」ではなく「一云」であることは、原資料の相違を暗示する。結句「一云」の原文「将会跡母戸八」の「母」は、母親を意味する「おも」を当て用いた字。「母父（おもち）」→443。

3．2　新編日本古典文学全集の解釈[2]

【大意】楽浪の　志賀の〈また「比良の」〉大わだは　このように淀んでいても　昔の人にまた逢えようか〈また「また逢うだろうとも思えない」〉。

○「比良の」大わだ－比良は滋賀郡志賀町木戸から小松にかけての一帯。和邇川（わにがわ）河口より北の北湖の西南部に当り、近江京に近い唐崎辺りより北約10kmも離れる。大ワダは湾曲した入江。今も湖西線志賀駅当りには長汀が残る。

○淀むとも－大宮人を待って淀んでいたとしても。仮定条件は時に現在の確定的事実についても、未来の連続する動作・作用と見なして用いられる。

○「逢はむと思へや」－思ヘヤは「海人なれや」㉓などの疑問条件から派生した反語的文末形式。思フの主語は作者。「母」はオモを表す借訓。

3．3　講談社文庫（中西　進）の解釈[3]

【大意】楽浪の志賀の〔一ハ云ハク、比良の〕大わだに、水は昔ながらに湛えられているにしても、昔の人にまた逢うことはあろうか〔一ハ云ハク、逢うとは思えない〕。

○比良－大津の宮北方、比良山の東麓、比良川のあたり。

○大わだ－水の淀むところ。川・海の曲岸に抱かれた部分。

○昔の人－天智朝の宮廷人をさす。具体的には天皇や額田王、舎人吉年ら。

○逢はめやも－「やも」は強い否定をもった疑問。

○逢はむと思へや－「や」は上に同じ（強い否定をもった疑問）。

3．4　日本古典文学大系の解釈[4]

【大意】志賀の大わだは水が淀んで（人を待って）いるが、淀んでいても、昔の人に再び会うことが出来ようか。出来はしない。

○比良－滋賀県滋賀郡志賀町南小松・木戸のあたり。大津市よりは北。

○大わだ－ワダは湾曲したところ。海や湖や河にいう。

○淀むとも－ここのトモは既定のことを仮定のようにして表現する語法。トモは普通、単純な仮定を表現するとされている。しかし、佐伯梅友博士が、修辞的仮定と名づけられたような一種の用法がある。それは、既定の事実が眼前にあるにもかかわらず、それを仮定の事実のようにして表現するものである。この歌でも、志賀の大わだが淀んでいるのは事実である。それをあたかも仮定のようにして、決して昔の人と再会できないということを強調するわけである。この修辞的仮定では、下に反語・推量などが来るのが普通である。「高円の尾の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れめや」（巻二十、四五〇七）の如きは、その前に、「尾の上の宮は荒れにけり」とあって、すでに荒れてしまっていること明らかである。そして、歌の末尾が「忘れめや」と反語になっている。今ここの「志賀の大わだ淀むとも」の場合も末尾は反語である。巻二、一三三「ささの葉はみ山もさやに乱るともわれは妹思ふ別れ来ぬれば」のような場合は、「小竹の葉は山全体をざわめかすばかりに乱れているが乱れていても（我はみだれず）一すじに妹を思っている、別れて来たのであるから」の意で、「我は乱れず」という否定表現が中に込められて省略されている。

3．5　澤瀉久孝の解釈[5]

【大意】ささなみの滋賀の（一ニ云フ、比良の）大わだは、人待ちがほに淀んでゐようとも、昔ここに遊んだ大宮人に再び逢はうか。（一ニ云フ、逢はうと思はれようか。）

○志賀の大わだ－原文「大和太」をオホワタと訓み、大海の意に解する説があるが、「太」は多く濁音の假名に用ゐられ、人麻呂、人麻呂集の作には清音に用ゐた例がないので今もオホワダと訓むがよく、その「わだ」は「千船湊大和太乃濱（チフネノハツルオホワダノハマ）」（六・一〇六七）、「夢乃和太（イメノワダ）」（三・三三五、七・一一三ニ）などの和太と同じく、代匠記に「水ノ入コミテマハレル所也」とあるが正しい。即ち唐崎の南の灣入したあたりを滋賀の大わだと云つたものと思はれる。なほこの事は次の句の條でもいふ。一云の比良は比叡山の北につづく比良山の麓、今志賀町木戸、小松のあたりをさしたものと思はれるが、大津舊都としては北に離れすぎるので、本文の方によるべきであらう。

○よどむとも－「よどむ」は「不通」（ニ・一一九、十二・ニ九九八、その他）、「止息」（四・六三〇）などの文字も用ゐられてゐて、その義明らかである。「とも」は「ども」が事實を述べるに封し、假定を示すと説明せられる爲に、事實に反した事を述べるに用ゐられると考へられ、今の場合は、淀んでゐないけれども、たとへ淀むとも、と解譯せられたり、或いはこの場合の「とも」は「ども」と同様に解すべきだと説かれたりしてゐたのであるが、仮定といふ事は必ずしも事實に反するに限らないのであり、急いでゐる人を見て「たとへ急ぐとも」といふ事は今もいふ事である。從って今も淀んでゐる實景を見ながら「淀むとも」と云つたと見てよいのである。この「とも」については柴生田稔（『萬葉研究』下、三頁）、佐伯梅友（『萬葉語研究』二五五頁）、木之下正雄（あけび第十七巻第七號昭和十二年七月）の諸氏に説がある。「浦者無友（ウラハナクトモ）」（ニ・一三一）、「君不座十方（キミマサズトモ）」（ニ・一七ニ）などの「とも」も同例である。事實に反するといふ説によると、上の句の「大和太」をオホワタと訓み、大海の義にとり、琵琶湖の水は、表面は穏かだが瀬田川に近いあたりでは水流が急であり、その事實に對して「淀むとも」と云つたのだといふ説にもなるのであるが、前に述べたやうに、「太」は濁音の假名と見た方がよく、唐崎のあたりから入江になつた水がどんよりと淀んでゐるのが實景であり、たとへ人待顔に淀んでゐ

ようともと解くべきである。「太」の用字と「とも」の用例と相俟つて、この訓義が動かないものとなる事が證明せられるのである。

○昔の人にまたも逢はめやも－「昔の人」は大津の宮の大宮人たちをさしたので、「や」は「む」の已然形をうけて反語となった助詞。「も」は詠歎の助詞。その昔の大宮人たちに再び逢はうか、逢ふ事は出來ない、の意。この場合も前の作と同様、滋賀の大わだを擬人しての作である。

○逢はむともへや－「もへや」は「思へや」のオの省略。「や」は上の場合と同じく反語であるが、「於毛倍也（オモヘヤ）」（十五・三六〇四）、「和須流礼夜（ワスルレヤ）」（十四・三四九八）などの如く、動詞の已然形に直接つづくところが上代語法の特色である。この歌の場合も本文の方が適切であらう。

【考】右の二首とも擬人法を用ゐた作で、人麻呂らしい風格を持つたものであるが、前者は「幸くあれど…待ちかねつ」と事實を事實として述べ、後者は「淀むとも…逢はめやも」と假定を加へ、主観をこめて、作者の昔を思ふ感懐が深められている。

3．6　菊池壽人の解釈[6]

【大意】志賀の大和太の水よ、汝も昔がこひしいと見えて、徘徊顧望して人待ち顔に見えるが、いつまでさうして待って居たとても、昔なじみの人に、またと逢ふ事が出來ようや、出來まいぞよ。

此の荒都を弔ふ歌は長歌よりも反歌がよい。殊にこの歌、立ち去りがたき思を、やすらふ水にたぐへた所、情緒纏綿、荒墟を眺め、湖水を眺めてたゝずんでゐる人麿の姿が見えるやうである。巻三、近江國から、都に上る途上、宇治河の邊で「いざよふ波の行方しらずも」（二六四）とよんだのは、此の感情の引き續きである。決して古義などのいふが如き單なる景色の歌ではない。なほそれはそこで述べよう。

○志賀能大和太（シガノオホワダ）－代匠記、考、檜嬬手、古義等は「大わだ」と訓んで、水の灣曲して入込んだ處と解してゐるが、僻案抄、攷證、燈、美夫君志等ほ「おほわた」と訓んで、大海の義（こゝは大湖の事）としてゐる。海をわたといふは常の事であるし、「太」ノ字、清音に用ひぬ事もないやうであるから、後説も然るべきではあるが、本來は濁音の文字で、吉野川の一つの淀みを「夢の和太（ワダ）」（懐風藻の詩には夢淵といってゐる）と唱へた例もあるから姑く前説に從っておく。いづれにしても歌の意義にはさしたる関係はないが、二説の分れる根據は次の「淀むとも」の一句にあるらしい。

○與杼六友（ヨドムトモ）－「よどむ」は流れんとして流れず徘徊躊躇してゐる貌で、こゝは「いつまで立ちやすらうて待ってゐようとも」といふのである。燈は大湖の水を淀まぬものとして「この大和太の水は淀む世なく勢多の方へ流るゝ故に、たとひ此水の淀む世はありともと、素よりあるまじき事を設けていふなり」と説いてゐる（美夫君志も之に同じてゐる）。一應尤らしく聞えるが、これは狭い文法上の知識に拘泥して、歌人の實情を考へない論といふべきである。なるほど理窟からいへば、大湖の末は勢多川となって流れ去るには相違ないから、淀むとはいへない。しかし人麿は今、辛崎附近の湖畔に立って、荒れ果てた舊都の光景に心を傷めてゐるのである。この際、二里も離れた瀬田川口に思を遣って「此の水は結局淀みはしないが、假りに淀む事がありとしても」などいふ理窟を考へる餘地があらうか。眼前見る所の小灣の水が、思ひなしにや、立ちやすらうて淀んでゐるやうに思はれるので、こゝに人麿の詩思が動いて、低回去るに忍びざる己が心を之に托して、此の歌が生れたのである。實感でなくてかうした歌がよめようか。「とも」は有り得べからざる事を假り設けていふ語であるからとて、美夫君志は巻廿「鳰鳥の息長川は絶えぬとも、君に語らふ事つきめやも」（四四五八）といふ歌などを引いて論じてゐるが、さうした場合の多いには相違ないけれども、「とも」の用法はそれだけには限らない。こゝは未來を要していふので「そのやうにしていつまで淀んで待ってゐようとも」といふのである。現在の状態から推して未來に及ぼすに「とも」といふ外はないではあるまいか。巻五「言とはぬ木にはありともうるはしき君がたなれの琴

にしあるべし」（八一一）、巻二「秋の田の穂向のよれる片よりに君によりなゝこちたかりとも」（一一四）なども之に準じて見るべきものであらう。要するに「大和太」は入江でも大湖でも歌の要旨には関係はない。（廣くいへば大湖の水も淀んでゐる。辛崎方面から見れば流れるやうな感じはしない。早瀬の水とはちがふのである。）ただ「淀むとも」の一句が此歌の眼目である。

○亦母相目八毛（マタモアハメヤモ）－「や」は反語、「も」は感動詞。

○将曾跡母戸八（アハムトモヘヤ）－これは一本にある結句で「あはむともへや」と訓む。「もへや」は「おもへや」の略、「や」は反語である。さてこの場合「おもふ」といふ語は極めて軽く用ひられ、殆ど意義の尋ねられぬほどなので、「あはむとおもへや」は「あはむや」といふだけの事である。これは古代の語法で、人麿の歌には特に多い。大方反語に伴って用ひられるがなほ後々の歌で述べよう。

3．7　山田孝雄の解釈[7]

【大意】篠浪のこのびわ湖のたとひ淀みてながるゝことなくとも昔の大津宮の繁栄に再びあはむやは、決して再び逢ふことかなはじとなり。山河は舊に依りてかはりはなけれど、往事茫として夢の如く、再び、これを見むこと能はじとなげく心を山水の自然によせてうたへるなり。

○左散難彌乃－「ササナミノ」とよむ。上に「楽浪乃」とかけると同じ語なり。

○志我能大和太－「シガノオホワダ」とよむ。「志我」は上に、「思賀」とかけると同じ地なり。「大和太」は大海の義なり。「海」を「ワタ」といふことは上の「渡津海」の條（一五）にいへり。代匠記、考、略解等に「ワタ」を曲の義として入江の水の淀むをいふといへるは次に引く燈にいへる如ぐ證なき事にして從ふべからず。拾穂抄に「志我ノ大海近江の湖也、此湖水の水は淀む事有とも昔の都人には又難逢となり」といへるをよしとす。この説に從へるもの僻案抄、燈、攷證、美夫君志等なり。

○一云比良乃－一本には「ヒラノオホワダ」とある由をいへるなり。これはさす所の物一なる上にいづれも道理なきことにあらねばいづれにてもあるべし。

○與杼六友－「ヨドムトモ」とよむ。「よどむ」は流れざるをいふ。これにつきては、燈の説よし。曰はく「志賀能大和太とは神代紀に曲浦をわたのうらとよめるによりて和太は入江の水の淀をいふと古註にみえたり。此説非なり。もと淀まぬ水に向ひてこそよどむといふ詮もあれ、元より淀なるをよどむとはいふべき事にあらぬをや。云々いづれにもあれこの大和太の水はよどむ世なく勢多のかたへ流るゝが故にたとひ此水のよどむ世はありともともとよりあるまじき事を設ていふなり。古人この轍多し。「すゑのまつ山浪も越なむ」などよめる類也」とあり。美夫君志はこれに賛していはく「巻二十（四十九右）に「爾保杼里乃　於吉奈我河波半　多延奴等母　伎美爾可多良武　己等都奇米也母（ニホドリノオキナガカハハタエヌトモキミニカタラムコトツキメヤモ」（四四五八）とあるも絶まじき河の水の絶る事ありとも君にかたらん事はつきぬといふにてここと全くおなじおもむきの歌なり。合考すべし」といへり。これらの説にて歌の意をさとるべし。

○亦母相目八毛－「マタモアハメヤモ」とよむ。「マタ」は再びの意なり。「メ」は「む」の已然形にして「ヤモ」は已然形をうけて反語をなす助詞なり。再び昔の大宮人に逢はむやはえ逢はじとなり。

○一云将會跡母戸八－異本にある歌の結句かくの如しとなり。「アハムトモヘヤ」とよむ。「モフ」は「おもふ」の上略、「ヤ」は助詞にして反語をなせるなり。

4．先行研究の問題点

31番歌の問題点は、一言でいうならば、「淀むとも」の「とも」の解釈に帰着する。「時代別　国語大辞

典　上代編」によると、「とも」には以下の二つの用法がある[8]。一つは未だ事実でないことを条件とする「逆説の仮定条件」をあらわすものである。もう一つは既に事実であることを仮定的に条件とする「修辞的仮定」と呼ばれるもの（帰結句との意味的な結びつきを強める）である。後者の用法については、3.4節に詳しい説明がある。この二つの用法のうち、前者の「逆説の仮定条件」はさらに二つの用法に分かれ、「現実には起こりえない」ことを仮定する「反実仮想」と「現実に起こりうる」ことを仮定する用法がある。

過去の研究における31番歌の代表的な解釈は次の二つである。一つは「淀むとも」を「逆説の仮定条件（反実仮想）」と解するものである。

> 志賀の大わだは「現実には淀むことは決してありえない」が、もし仮に「淀む」ようなことが起こったとしても、昔の人に逢うことは二度とないだろう。

もう一つは「淀むとも」を「修辞的仮定」と解するものである。

> 志賀の大わだは「現実にいま目の前で『人待ち顔に』淀んでいる」が、たとえそのように「人待ち顔に淀んでいた」としても、昔の人に逢うことは二度とないだろう。

上の二つの解釈の違いは、文法的には、接続助詞「とも」を「逆説の仮定条件（反実仮想）」と解するか、それとも「修辞的仮定」と解するか、という点にある。また内容的には、びわ湖の水を「現実に淀むことはない」と解するか、それとも「現実に淀んでいる」と解するか、それぞれまったく「逆の」解釈となっている。一体どちらの解釈が正しいのだろうか。

すでに第3節で紹介した先行研究の七つの解釈のうち、3.7節の山田孝雄の解釈だけが「逆説の仮定条件（反実仮想）」で、それ以外の解釈はすべて「修辞的仮定」となっている。このことからも、最近の「通説」が「修辞的仮定」に基づく解釈であることがわかる。しかしながら、これらの解釈を詳細に検討してみると、いずれの解釈にも問題点があることがわかる。以下、これらの問題点について検討していくが、その前にまず、「志賀の」に対する異伝「比良の」の問題について考えておこう。

4.1　「志賀の」に対する異伝「比良の」の問題

31番歌の第二句には、本文の「志賀の」に続いて「比良の」という異伝が記載されている。人麻呂のオリジナルの歌に記載されていたのはどちらの方であろうか。まずこの問題について考えてみよう。

この異伝の問題は、これまで歌の解釈で重要視されることはほとんどなかったが、よく考えてみると、むしろ異伝の方が古くオリジナルである可能性がある。今日の文献学では、できるだけ古い史料を重要視するのが常識であるが、万葉集のような古代の歌集では「考証や研究」を目的とするものではないから、むしろ編纂当時に普及していたものを重視したと考えられる。したがって、人麻呂が最初に作った歌には「比良の大わだ」とあったかも知れず、時代が下って、「この歌の真意」（後に述べるびわ湖の「環流」の存在）を理解できる人々が少なくなり、発句の「ささなみの（楽浪の）」という枕詞に引きずられて「比良」よりも一般的な「志賀」に変えられた可能性がある。

次にこの点を史料に基づいて考察してみよう。「ささなみの」という枕詞が用いられている歌は万葉集中に15例あり、それが係る語句と歌番号をまとめたのが次の表である。

「ささなみの」が係る語句	歌の巻／番号
大津宮	01/0029
故京、旧都	01/0032、03/0305
国都美神	01/0033
大山守	02/0154
思賀、志賀、思我、四賀	01/0030、01/0031、02/0206、02/0218、07/1253、07/1398、13/3240
連庫（なみくら）山、波	07/1170、12/3046
比良、平（山）	01/0031、09/1715

この表を見ると、「ささなみの」は「しが（思賀、志賀、思我、四賀）」に係る例が圧倒的に多いことがわかる。もし歌の異伝が、歌が語り継がれるうちに変化して生じたものだとすれば、「ひら（比良、平）」から「しが」に変わることはあっても、その逆の可能性はきわめて少ないだろう。なぜならば、言葉の変化は、メジャーな用法がマイナーな用法に取って代わっていくのが普通であり、その逆は起こりにくいからである。その意味で、31番歌の「志賀の」という語は、人麻呂のオリジナルの歌では「比良の」であった可能性がある。

さらに、万葉集の額田王の歌（巻一の８番歌）の左注に、山上憶良の『類聚歌林』と『日本紀』を引いて「戊辰年（648）の比良の宮への行幸」および「斉明五年（659）春三月三日に近江の平（比良）の浦への行幸」の記事が掲載されている。いずれも、天智天皇の即位（662年）より前（14年前と３年前）の記事ではあるが、これらの記事によって我々は、天智天皇がびわ湖南岸に大津宮を造営する（667年頃）はるか以前から、すでに「比良」の地が朝廷の有名な行幸先であったことを知る。そして人麻呂の31番歌になぜ異伝として「比良」の地が登場するのかを知るのである。

以上のように考えてくると、31番歌の意味を考える上で、「比良の」という異伝を単なる「誤り」として「無視」すべきではない。どれが本当のオリジナルであるかの結論は保留するにしても、少なくとも本文「志賀の」を異伝「比良の」と置き換えても意味がとおるような歌の解釈を追求すべきであろう。

４．２　「とも」を「修辞的仮定」と解する「通説」の問題点

この説は、びわ湖南岸の大津宮跡近くで、「びわ湖の水が『人待ち顔に』淀んでいる」という「実景」を目にして作った歌だと解釈する。この説には少なくとも以下の四つの問題点がある。まず第一の問題点は、すでに第２節でも指摘したように、「淀む」という語には「人待ち顔に淀む」という擬人化された用例がないことである。

第二の問題点は、この説では「志賀の大わだ」は解釈できるが、異伝の「比良の大わだ」は解釈できないことである。というのは、「比良」の地は大津宮跡からかなり北に離れており（約20km）、視界にはなく、「実景による歌」という条件を満たさないからである。この点について澤瀉久孝は3.5節で次のように述べている。

> 一云の比良は比叡山の北につづく比良山の麓、今志賀町木戸、小松のあたりをさしたものと思はれるが、大津旧都としては北に離れすぎるので、本文の方によるべきであらう。

この記述からもわかるように、この説にしたがう以上、「志賀の」と「比良の」は両立することはできず、

異伝の「比良の」を一方的に「誤り」だとして切り捨てなければならない。ところが実際は、異伝の「比良の」が誤りなのではなく、この歌が「実景」によるものであるという「思い込み」こそ間違っているのかも知れないのである。「比良の」という異伝には、すでに4.1節で述べたようにそれなりの理由があるからである。

第三の問題点は、「志賀の大わだ」を大津宮跡近くの「湾曲した入江」だと想定した場合、びわ湖をよく知る人間（後で述べる第6節の参考歌⑨～⑮から人麻呂はこの条件を満たす）が、この限定した領域に対してわざわざ「大」という形容詞をつけて「大わだ」と表現するだろうか、という疑問である。というのは、和名抄に言う「滋賀郡」の領域はかなり広く、北は高島郡高島町と境を接し、南は瀬田川を境とする一帯を指すが[9]、この領域には明らかにもっと広い「大わだ」が存在するからである。それは滋賀郡志賀町の和邇川河口付近から近江舞子にかけての湾岸である。この一帯こそ「志賀の大わだ」という呼び名にふさわしい。また、ここだと異伝に登場する「比良」という地名ともピッタリ合うのである。

第四の問題点は、この説では、歌の前半部と後半部が「自然につながらない」ことである。第2節でも触れたように、人麻呂がこの歌で表現したいのは歌の後半部の「昔の大宮人たちに逢うことは二度とないだろう」という部分である。当然、この気持ちを導くために歌の前半部があるわけだが、この前半部が「志賀の大わだが今こうして目の前で『淀んでいる』けれども」というのでは、ピントがずれているように思われる。「湖の水が淀んでいる」ことと、「昔の人に二度と逢えない」ということの間には何ら「関連」がないからである。この疑問に対して、「通説」では、人麻呂は、びわ湖の淀んでいる水を見て「人待ち顔に淀んでいる」と「擬人化」して詠んだのだろうと説明するが、多くの「淀む」の歌があるにもかかわらずこのような用例が一つもないだけに、この説明は信じがたい。

そもそも、もしびわ湖の水が「常に淀みっぱなし」であるならば、「淀むとも」という（修辞的）「仮定」をわざわざ使う必要があるだろうか。例えば、「太陽が『東』から昇るとも」という表現を使う必要があるだろうか。まったくないように思われる。そこで念のため万葉集の「とも」（接続助詞）の用例を調べてみると、少なくとも構造的にはそれに似た例がいくつか存在する。しかし、その意味を検討してみると、いずれも歌として自然な解釈が可能なものばかりである。具体的な例をあげよう。

参考歌②：石見の海　角の浦廻を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそ見らめ
　よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟はなくとも　いさなとり　海辺を指して
　にぎたづの　荒磯の上に　か青く生ふる　玉藻沖つ藻　朝はふる　風こそ寄せめ　夕はふる
　波こそ来寄れ　波のむた　か寄りかく寄る　玉藻なす　寄り寝し妹を…　(02/0131)
参考歌③：言問はぬ木にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしあるべし　(05/0811)
参考歌④：かけまくも　あやに恐し　…　神葬り　葬り奉れば　行く道の　たづきを知らに
　思へども　験をなみ　嘆けども　奥かをなみ　大御袖　行き触れし松を　言問はぬ
　木にはありとも　あらたまの　立つ月ごとに　天の原　振り放け見つつ　玉だすき
　かけて偲はな　恐くあれども　(13/3324)

まず「参考歌②」では、作者（人麻呂）は石見の海には「浦と潟はない」という現実を知りながら、「浦はなくとも」、「潟はなくとも」という（修辞的）「仮定」表現を用いている。しかし、この歌の内容は明確で不自然な（ピントのずれた）ところはない。

玉藻は、ふつうは浦や潟に生えているものを刈るのであるが、石見の海の場合は「浦」も「潟」も

ないけれども、沖の荒磯に生えた玉藻が風や波によって海辺に打ち寄せられてくる…

次の「参考歌③」は、「木」が「言葉をしゃべらない」のはあまりにも当然のことであり、この歌の前半部は、一見すると、「太陽が『東』から昇るとも」という表現と同様無意味なように見える。しかし実は、この歌が作られた経緯が（一つ前の歌の）題詞に長々と記載されているのである。それによると、夢の中に「琴」が娘女の姿となって現れ、「木」から「琴」になるまでの生い立ちを話した後で、「自分はいつも君子のそばに置かれる琴になりたいと願っている」と言って最後にひとつ歌を詠む、その歌に対する返歌がこの「参考歌③」である。したがって、この歌の背景を考慮すると、「言問はぬ木にはありとも」という表現は決して不自然なものではなく、

この琴は、一見、言葉を話さない単なる「木」にすぎないように見えるけれども、実際には夢に現れた娘女のように感情をもった「琴」であり、立派な君子の手馴れの琴にすべきである。

という意味に解することができる。

「参考歌④」は挽歌の一部であるが、この中にも「参考歌③」まったく同じ表現「言問はぬ木にはありとも」が登場する。この歌には題詞による説明はないけれども、前後の文脈から考えて、

…（皇子を）葬った後は、行く道もわからず、いくら思ってもむなしいばかりで、いくら嘆いてもきりがないので、木が「言葉をしゃべる」わけではないけれど、皇子の袖が触れた松の木を（皇子の形見だと思って）月が変わるごとに見上げてお偲びしよう、恐れ多いけれども。

という意味として不自然さはない。ちなみに、この歌における「言問はぬ木にはありとも」の箇所は、原文では「言不問　木雖在」となっており、新編日本古典文学全集を除いて、ほかの多くのテキスト（新日本古典文学大系、日本古典文学大系、講談社文庫など）では「言問はぬ木にはあれども」のように「逆説の確定条件」「ども」として訓まれている。

以上のほかに、3．4節でも指摘されているように、31番歌と非常によく似た「～とも～反語」という構造をもち、「とも」が「修辞的仮定」として用いられている歌がいくつかある。一つ例を示そう。

参考歌⑤：高円の野の上の宮は荒れにけり立たしし君の御代遠そけば　(20/4506)
参考歌⑥：高円の峰の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れめや　(20/4507)

この二つの歌は、題詞に「興に依りて各（おのおの）高円の離宮の処を思ひて作りし歌五首」とある五つの歌の最初の二つを掲載したものである（大伴家持と大原今城真人の歌）。「参考歌⑥」の「荒れぬとも」は、その前の歌「参考歌⑤」に「荒れにけり」と「過去」の助動詞「けり」が使われていることから、「すでに荒れた」宮を目の前にして詠んだ歌であることは疑いない。意味的には「荒れぬれど」として「逆説の確定条件」「ど」を用いても同じであるが、ここでは「修辞的仮定」の「とも」を用いて意味を強めている。

（宮が荒れていなければ御名を忘れないのは当然のことであるが、）こうして宮が荒れてしまっても、あなたの御名は決して忘れはしない。

この歌でも、歌の前半部と後半部は「自然」につながっており、「荒れぬとも」の「とも」が作者の気持ちを強調するために効果的に役立っていることがわかる。

「修辞的仮定」の「とも」を用いた例はほかにもいくつかあるが、いずれもその歌の意味は明確であり、不自然なところはない。しかしながら、31番歌に限り、「志賀の大わだ淀むとも」の「とも」を「修辞的仮定」として解釈する限り、「現在目の前で志賀の大わだが淀んでいる」という歌の前半部と、「昔の人に二度と逢えないだろう」という後半部の内容が、自然な論理展開にならず「ピントがずれている」ように思われる。これが第四の問題点である。

以上、長々と述べてきたが、大事なことは、「志賀の大わだ淀むとも」という表現が使われている以上、意識的かどうかは別として、人麻呂の頭の中には「淀まない大わだ」が（少なくともどこかに）存在するということが想定されているはずである。でなければ、我々が通常「太陽が『東』から昇るとも」という表現を使わないのと同様、「淀むとも」という表現を使いはしない。この点において通説は不自然なのである。

4．3　「とも」を「反実仮想」と解する「もう一つの説」の問題点

この説は、山田孝雄が3．7節で説いているように、「志賀の大わだ」の「大わだ」を「大海」の意味に解し、「志賀（びわ湖）の大海は決して淀むことがない」ことを前提に、「淀むとも」の「とも」を「反実仮想」として次のように解釈する。

> びわ湖の大海は「現実には淀むことは決してありえない」が、もし仮にこの大海が「淀む」ようなことがあったとしても、昔の人に逢うことは二度とないだろう。

この解釈は、「志賀の大わだ淀むとも」を、現代風に言うならば「もし仮に太陽が『西』から昇るとも」という「反実仮想」の意味に解している。なお、「大わだ」は「大きく湾曲した入江」という意味であり、これを上のように「大海」の意に解するためには「大わた」と「清音」で訓まなければならないが、第二句の原文に「大和太」と表記されている以上、澤瀉久孝が3．5節で指摘しているように「大わだ」と「濁音」で訓むべきであり、したがって「志賀の大わだ」を「びわ湖の大海」の意に解するのは適切とは言えない。しかし、この説の大事なポイントは、「とも」を「反実仮想」として解釈しているところにある。

「とも」が「反実仮想」を表している確かな例として、3．7節にも引用されている次の歌がある。この歌は構造的にも31番歌と同じ構造「～とも～めやも」をもっている。

> 参考歌⑦：にほ鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言尽きめやも　(20/4458)

「にほ鳥」は「水に潜るのが得意なカイツブリ（水鳥）」だとされており、「息長く潜る」ことから「息長（おきなが）」にかかり、ここでは「息長川」（滋賀県坂田郡近江町を流れる天野川）という川の名前にかかる「枕詞」として用いられている。歌の意味は、

> （息長川の水が絶えることは現実には決してありえないけれど、）もし仮に息長川の水が絶えるようなことがあったとしても、あなたに語る言葉は決して尽きないでしょう。

という「反実仮想」の内容となっている。

31番歌の解釈としては、4．2節の「修辞的仮定」に基づく「人待ち顔に淀む」などというあいまいな解釈より、こちらの方がよっぽど明快ですっきりしている。ただ問題は、この解釈の前提である「びわ湖の水が決して淀むことがない」という一点にある。この問題がクリアーできなければこの解釈は成立しえない。常識的には、びわ湖はあくまでも「湖」であるから、誰の目にも「水は静止して（淀んで）いる」ように見える。それなのに、この説では、常識とは逆に「びわ湖の水は決して淀むことはない」と説く。これは一体どういう根拠に基づくのだろうか。

地理的には、びわ湖の水は南端の瀬田川を経由して、宇治川、淀川と名前を変えながら最後は大阪湾まで流れ出ていく。したがって、少なくとも「理屈」としては、びわ湖の水は全体的に見れば非常に微々たるものではあるけれど、瀬田川を経由して「絶えず外部に流出」しており、全体として少しずつ南側に向かって流れていることになる。この「流れ」がある限り、びわ湖の水は厳密な意味で「淀んでいる」とは言えない。この説では、この事実を根拠にして、びわ湖の水は「永遠に淀むことなく南に向かって少しずつ流れ続けている」と主張し、また人麻呂もそのように考えながら31番歌を作ったと解釈するのである。

ところが、この考え方は自然科学的観点から見ても必ずしも正しいとは言えないところがある。確かに、南湖の瀬田川の河口付近では「定常的な水の流れ」が存在するが、びわ湖は非常に広い湖であるので、河口から遠く離れたところ（特に北湖あたり）では、次の第5節で述べるような「還流」とよばれる定常的な渦状の流れが存在し、瀬田川の河口付近から水が流れ出ることによる影響は事実上存在しない。実際、水が「北に向かって」流れている場所すら存在するのである。したがって、「南湖」の瀬田川の河口付近から湖水が流出することに根拠をおく「びわ湖の水が淀むことがない」という議論は、「北湖」についてはまったく成立しない。もし成立するとしても「南湖」の限定された領域についてのみである。さらに、この説に対しては、別の観点から3．6節で菊池壽人が次のような批判を行っている。

> …なるほど理屈からいへば、大湖の末は勢多川となって流れ去るには相違ないから、淀むとはいへない。しかし人麿は今、辛崎附近の湖畔に立って、荒れ果てた旧都の光景に心を傷めてゐるのである。この際、二里も離れた瀬田川口に思を遣って「此の水は結局淀みはしないが、仮りに淀む事がありとしても」などいふ理屈を考へる余地があらうか。眼前見る所の小湾の水が、思ひなしにや、立ちやすらうて淀んでゐるやうに思はれるので、こゝに人麿の詩思が動いて、低回去るに忍びざる己が心を之に托して、此の歌が生れたのである。実感でなくてかうした歌がよめようか。…

もっともな批判ではあるが、31番歌の「志賀の大わだ」を大津宮跡近くの「湾曲した入江」付近に限定して考えるならば、少なくとも「理屈の上」ではこの説も可能である。ところが実際には、多くの人々は、このような「理屈」から人麻呂が31番歌を作ったとは信じていない。そして、現在この解釈が顧みられることはなく、昭和年代の中期以降、4．2節で述べた解釈の方が「通説」となり今日に至っている。

ところで、この説にはほかにもう一つ問題点がある。この説では異伝の「比良の大わだ」が解釈できないことである。比良の地はびわ湖南岸の瀬田川よりずっと北側にあるので、比良の付近では瀬田川による流出の影響はほとんど体感できないからである。

以上述べてきたように、従来の「淀むとも」の解釈は二つとも問題点をかかえていることがわかる。私たちの新しい解釈を提案する前に、まず「びわ湖の還流」について紹介しておこう。

5．びわ湖の環流について

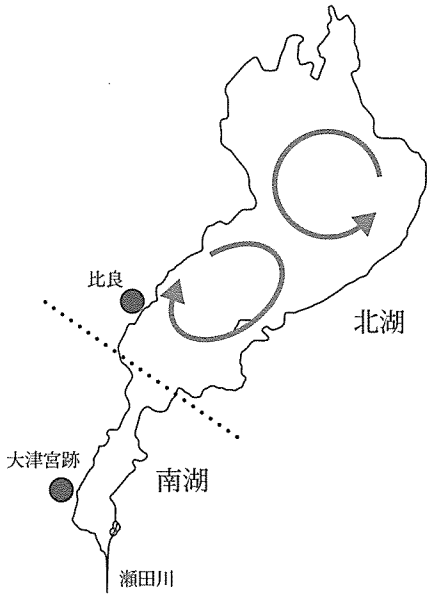
びわ湖は図に示すように、びわ湖大橋の少し北あたり（図中の点線）を境にして「南湖」と「北湖」に分かれている。南湖は水深が浅く、平均水深は４ｍである。これに対して、北湖の水深は深く、平均水深43m、最深部は安曇川沖の104mである[12]。びわ湖の南湖と北湖は、このように水深に約10倍以上の大きな違いがあるが、このほかにも以下に述べる「還流」が存在するか否かの大きな違いがある。

一般に、小さな湖では（川の流入口や流出口の近くを除き）水は静止しており、定常的な流れは存在しない。ところが、びわ湖の「北湖」のように非常に深くて大きな湖になると、海における海流（対馬海流や黒潮など）のような定常流が生じることが実際の観測や室内実験やコンピュータ・数値シミュレーションなどによって確認されている。こうした定常流は、温度差（湖岸付近と湖心付近の水の温度差）や風が駆動力となり、それに地球の自転に伴うコリオリ力（台風が渦を巻くのはこの力による）が加わって大きな渦状の流れに発達していく[10][11]。

びわ湖の場合、こうした定常流は、図のような閉じた形の大きな「渦状の流れ」となり、「環流」と呼ばれている。従来は、1925年に行われた神戸海洋気象台による調査結果に基づいて三つの環流が存在するとされてきたが、最近の調査によると図のような二つの安定した環流が存在することがわかっている。びわ湖の環流は、北から南に向かって順に「第一環流」、「第二環流」（、「第三環流」）と名づけられている。また、これらの環流は水温躍層（水温の鉛直分布が大きく変化する層で、夏季には深さ10～20m付近で急激に水温が変化する）より浅い層のみで発生し、春から秋にかけて発達して夏に最大となる。その流速は数十cm／秒（10～20cm／秒）にも達すると言われている。なお、長期的に安定して存在する環流は「北湖」にだけ存在し、「南湖」には存在しない[11][12]。

海の場合、月の引力による一日二回の「潮汐」（潮の満ち引き）に伴う潮流があるので、ある向きに流れたり、逆向きに流れたり、あるいは「淀んだり」する。この潮流は月に二回、満月と新月の頃にもっとも大きくなる。なお、対馬海流や黒潮のようなゆっくりとした「海流」は潮汐による潮流に比べると流速がかなり遅く「外洋航海」の場合以外はふつう目立たない。

これに対して湖の場合、ふつうの小さな湖では水の流れは生じないが、びわ湖の「北湖」のような非常に深くて大きな湖では、海のような「潮汐」は存在しないものの（あったとしても極めて小さい）、風と温度差と地球の自転によるコリオリ力によって、海の「海流」に相当するゆっくりした定常流が生じ「環流」へと発達する。還流の速さは、たかだか10～20cm／秒程度であるが、一見小さいように見えても、一時間につき約360～720mも流されることになり、しかも「定常的」な流れであるため、必ずしも無視することはできない。



6．新しい解釈の提案

以上の議論をふまえて、私たちは31番歌の「淀むとも」を「実景」ではなく「反実仮想」として次のよ

うに解釈する。

志賀（比良）の大わだは「現実には淀むことは決してありえない」が、もし仮にこの大わだが「淀む」ようなことがあったとしても、昔の人に逢うことは二度とないだろう。

この解釈は、表面的には、「大わだ」を「大海」ではなく「湾曲した大きな入江」と解する点を除けば、3．7節の山田孝雄の解釈（先行説は僻案抄、燈、攷證、美夫君志等）とまったく同じである。ただ、本質的な相違点は、「びわ湖の水が決して淀むことがない」ということの根拠を、第5節で紹介したびわ湖の「北湖」に存在する「還流」に求める点である。従来の説は、びわ湖南端の瀬田川の河口付近から水が流出することによる「びわ湖の微々たる水の流れ」を念頭におくものであった。その他の相違点も含めて、私たちが提案する新しい解釈の要点を整理すると次のようになる。

(1)　「志賀（比良）の大わだ淀むとも」は「実景」を詠んだものではなく「反実仮想」である。
(2)　「志賀（比良）の大わだ」の場所は、びわ湖南岸の大津宮跡付近ではなく、滋賀郡志賀町の和邇川河口付近から近江舞子にかけての湾岸である。これは和名抄に記載されている古代の「滋賀郡」の領域に含まれる[9]。この「大わだ」には「還流」（第5節の図の第二還流）が発生するので、少なくとも春から秋の長期間にわたって「淀まない」。また、この領域は「比良」の地と接近しているので、「比良の」という異伝に対してもそのままあてはまる。
(3)　人麻呂の一連の歌を作った時期は春から夏にかけてであるが（このことは29番長歌の最後付近から推測できる）、これは「還流」が発達する時期に一致する。
(4)　「還流」の流速は川の流れや海の潮流に比べればかなりゆっくりしているが、それでも一時間あたり300～700m程度の流れであり、「船人」にとっては十分体感できる速度である。しかも、流れは定常的に安定して「淀むことがない」。
(5)　人麻呂がびわ湖の「還流」の存在を「知っていた」可能性を示唆する歌が、万葉集の柿本人麻呂の「作歌あるいは歌集」の中にある。これについては以下で詳しく検討する。
(6)　私たちの解釈は「北湖」に対してはあてはまるが、狭い意味での志賀の地である大津宮付近の「南湖」に対しては「環流」が存在しないのであてはまらない。

「志賀（比良）の大わだ淀むとも」の解釈は、論理的に考える限り、「実景」と解するよりも「反実仮想」と解する方が当を得ているように思われる。というのは、「一度死んだ人間に再び逢う」などという発想は「太陽が『西』から昇る」ことと同様非現実的なものであり、こうした発想は「反実仮想」の世界でしか意味をなさないように思うからである。歌の後半部「昔の人にまたも逢はめやも」は「死んだ人間に再び逢うことは絶対にありえない」という強い反語表現であり、これが歌の前半部と論理的に自然につながるためには、歌の前半部「志賀（比良）の大わだ淀むとも」の意味もまた「現実世界では絶対に起こりえない」というような内容が来るはずである。ところが、通説が主張する「びわ湖の水が『人待ち顔に淀んでいる』ように見える」という内容は「絶対に起こりえない」ことではない。この意味において、通説の解釈は当を得ていないように思われる。実例を見よう。

参考歌⑧：大船に小船引き添へ潜くとも志賀の荒雄に潜き逢はめやも　(16/3869)

この歌は、神亀年間（724～729）に筑前国宗像郡の津麻呂という人が対馬に食料を送る船頭役に任じられたとき、老齢のため海路に堪えられないという理由で筑前国糟屋郡志賀村の海人である荒雄に代理をお願いするが、荒雄はこれを快く承諾して肥前国松浦県の美祢良久の崎から対馬に向けて出港する、しかし途中で暴風雨にあい海中に沈んでしまう、そのとき妻子が荒雄を慕って作った歌である（あるいは山上憶良が妻子の悲しみに同情して作った歌ともいう）。この歌の後半部は、対馬海峡の海底に沈んだ荒雄を「潜って」見つけ出すのは決してできないだろう、という意味の強い反語表現であり、これを導く前半部は「（潜く）とも」という接続助詞を用いて「もし仮に、大船に多数の小船を添えて大規模な捜索隊を出し、『潜って』探したとしても」という「反実仮想」の内容になっている。対馬海峡は、壱岐と対馬間の最大水深が135m、対馬と朝鮮半島間の最大水深が228mの深い海である。人間が潜れる深さはせいぜい数十メートル程度であり、対馬海峡の海に潜ることは不可能なことである。しかし、仮に「想像の世界」で大規模な捜索隊を出して「潜って」探したとしても広大な海ゆえに荒雄を探し求めることはとうていできないだろう、というのがこの歌の意味である。この歌と31番歌を比較すると、両方とも「～とも～めやも」という歌の構造がまったく同じであるだけでなく、歌の内容においても現実には起こりえないことを空想している点で共通している。したがって、31番歌の「淀むとも」もまた「反実仮想」と解すべきであるように思われる。

ともあれ、私たちの解釈は、人麻呂がびわ湖の「環流」の存在を実際に「知っていた」ということを前提にしている。さらに言うならば、単なる「聞いただけの知識」ではなくて、実際に「環流」を経験し、肌で感じて知っている必要がある。そうでなければ、びわ湖の「環流」の存在を背景とした31番歌のような歌を作るはずがないからである。「農民」や「山の民」にはこのような歌は作れない。「船を使う人」でなければならない。もちろん、職業的な「漁師」である必要はないが、古代の官人たちのように職業がら日本各地を「旅」して廻り、何度も「船乗り」を経験せざるをなかった人たちもこの条件を満たす。では人麻呂はこのような条件を満たしていただろうか。この点を調べるために、「びわ湖」と関わりのある「人麻呂」の歌を万葉集中から探すと次の７首が見つかる。

参考歌⑨：近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ　(03/0266)
参考歌⑩：高島の阿渡川波は騒けども我は家思ふ宿りかなしみ　(09/1690)
参考歌⑪：旅なれば夜中にわきて照る月の高島山に隠らく惜しも　(09/1691)
参考歌⑫：近江の海沖つ白波知らねども妹がりといへば七日越え来ぬ　(11/2435)
参考歌⑬：近江の海沖つ島山奥まけて我が思ふ妹が言の繁けく　(11/2439)
参考歌⑭：近江の海沖漕ぐ船の碇おろししのびて君が言待つ我ぞ　(11/2440)
参考歌⑮：近江の海しづく白玉知らずして恋せしよりは今こそ増され　(11/2445)

この中で、特に下から二番目の「参考歌⑭」はびわ湖で船から碇を下ろして停泊するという内容のものであり、人麻呂がびわ湖で「船乗り」を実際に経験していることを証言するものである。また、「びわ湖」とは直接関係しないが、人麻呂が旅の途中、海上にて「船乗り」を経験したことを示す歌がある。例は幾つもあるが、ここでは二例だけを示そう。以下の二つの歌は、「柿本朝臣人麻呂の、筑紫国に下りし時に、海路にして作りし歌二首」という題詞に続いて掲載されているものである。

参考歌⑯：名ぐはしき印南の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は　(03/0303)
参考歌⑰：大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ　(03/0304)

この歌からも、人麻呂が職業がら（海上の）船旅をしていたことがわかる。現代の船は、ディーゼルエンジンによって進むから（特に潮流の速い海域を除き）「潮の流れ」を意識することは少ないが、当時は人力で「漕いで」船旅をする時代であり、「潮の流れ」を知ることは「船旅をするための必須条件」であり、常に潮の流れを意識しながら船旅をしたものと思われる。実際、万葉集には「漕ぐ」や「真楫（まかじ）しじ貫き」という表現が多数存在することからもわかるように、当時の船は「櫂（かい）や楫（かじ）で漕ぐもの」であった。

以上の考察から、人麻呂がびわ湖の「環流」を「知っていた」可能性は十分あることがわかる。確かに、現代の科学技術文明の中に住んでいる我々からすれば、毎秒数十cmというびわ湖の「環流」は微々たるものにすぎないが、「櫂や楫」で船を漕ぎ、びわ湖岸に船を停泊させて夜を明かすような船旅を行った当時の人々にとっては「無視できない流れ」だったに違いない。そして、「淀むとも」という「反実仮想」の表現を使っていることからして、この「環流」が微弱ながらも「長期的に安定して流れる」ことを知っていたと思われる。しかし、このことは現代の我々にとっては「驚き」である。というのは、現代の我々がびわ湖に「環流」なるものが存在することを「再発見」したのは、1925年に行われた神戸海洋気象台による調査結果によるとされているからである。人麻呂はすでに1200年以上も前にびわ湖の「環流」の存在を「肌で感じて知っていた」可能性があるのである。

最後に、私たちの提案した説の限界について述べておこう。すでに上の「要点の整理」の最後にも書いたように、もし31番歌が通説が主張するように人麻呂が実際に大津宮跡近くの湖（「南湖」）を眺めながら「実景」をよんだ歌であるならば、私たちの説は成立しない。「南湖」は深さがわずか４ｍ程度の浅い湖であり、第５節でも述べたように長期的に安定した「還流」は生じないからである。

7．おわりに

この論文では、柿本朝臣人麻呂の近江荒都歌の第二反歌（31番歌）の解釈について、現在行われている解釈が通説化する以前に議論を戻し、はじめから検討し直した。過去に提出された二つの説を検討し、従来から問題となっていた「淀むとも」の解釈について新しい提案を行った。すなわち、31番歌は、現在「通説」となっているような「修辞的仮定」として「実景」を詠ったものと解釈するよりも、むしろびわ湖の「北湖」に存在する「還流」の存在を念頭におきつつ「反実仮想」として解釈すべきである、という提案である。

最後に、びわ湖の「還流」は実際にはほとんど目立たない流れであり、本当に人麻呂がこの「還流」の存在を知っていたのかどうか、第６節でいくつか間接的な証拠は示したものの、正直なところ、私たち自身もまだ一抹の疑問をもっている。この点については、読者の批判と今後の研究の発展に期待したい。

参考文献

［1］「萬葉集　一」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.36、1999年.
［2］「萬葉集①」、新編日本古典文学全集、小学館、p.44、1994年.
［3］「万葉集　原文付全訳注㈠」、中西　進、講談社文庫、p.64、1978年.
［4］「萬葉集　一」、日本古典文学大系、岩波書店、p.27、p.333、1957年.
［5］「萬葉集注釋巻　第一」、澤瀉久孝、中央公論社、pp.267－269、昭和32年.
［6］「萬葉集精考」、菊池壽人、中興館、pp.163－165、昭和10年.
［7］「萬葉集講義　第一巻」、山田孝雄、寶文館、pp.161－163、昭和３年.
［8］「時代別　国語大辞典　上代編」、三省堂、p.504、2005年.

[9] 「滋賀県の地名」(日本歴史地名大系25)、平凡社、p.92、1991年.
[10] 「特集・琵琶湖の物理学への道」、熊谷道夫、琵琶湖研究所ニュース「オウミア No.7」、1983年、
http://www.lbri.go.jp/omia/07/7-4.html
[11] 「びわ湖の湖流」、遠藤修一・滋賀大学教育学部、
http://www.sue.shiga-u.ac.jp/~endoh/koryu/kanryuu.html
[12] 「琵琶湖の現状と変遷整理シート」、国土交通省近畿地方整備・琵琶湖河川事務所、
http://biwakokasen.go.jp/others/genjou/pdf/base.pdf